

「私の第一声③」

【読書好きになった理由】

不定期コラムNo.1 で触れたように、赤坂台幼稚園に6歳で転入した当初から、人間関係をうまく築けませんでした。うまくいかない原因は、自分の行動にありました。小学校低学年から個人懇談会のたびに「落ち着きがない」「集中力がない」「忘れ物が異常に多い」と担任から言われ、家に帰ってから母にまた怒られていました。自分でもじっとしているのが苦手な自覚はありました。落ち着きがないことで字は乱れて汚いし、人の話を最後まで聴くことが出来ずにすぐ口を挟んだりして人に嫌な思いをさせていました。また、人間関係がうまくいかないために、その場にいる人に好かれたくて、すぐばれるような嘘もついていました。みんなと仲良くしたくて必死に自分を良く見せようとするのだけれど、逆に人は離れていくし、「変なやつ」ということでいじめの対象にもなったのです。もし、発達検査を受けていれば明らかにADHD（いわゆる多動）の診断となったと、今から考えれば分かるのですが、その頃、子どもが私の様な状況になる理由は、本人のがまんや、保護者のしつけが足りないからだと思われていた時代です。母も苦しかったと思います。

子どもの不適応行動の根本にはその子の発達の課題がある場合が多く、そこにうまく対応できていないと、二次的に人間関係が悪くなったり、日常生活に支障をきたしたりしていきます。昔は、不適応行動は特別なものだと捉えられており、生徒指導上の問題と、支援学級での対応とに分けて考えられていました。現在では、不適応行動は誰にでも起きる当たり前のものであり、特別支援の観点から、一人ひとりに合わせた適切な対応をすれば、多くのことは解決できることがわかってきています。本校でも、そのように取り組みを進めています。

私の話に戻ります。人間関係がうまくいかないため、しんどいことも多くありましたが、逆に結果としてプラスになったこともありました。つらい友達関係を一時でも忘れるために、小学校中学年から溺れるように読書をするようになったのです。今から考えれば現実逃避です。マンガも好きでしたが、当時は、マンガは害になるとされていて、

親からは、読ませてもらえませんでした。最初は、小学校の図書室にある小学生用のモーリス・ルブラン「アルセーヌ・ルパン」やコナン・ドイル「シャーロック・ホームズ」のシリーズでした。同じ棚にある江戸川乱歩の「少年探偵団」シリーズも好きでした。高学年になる頃には、小学校の図書室では物足りず、泉北高速鉄道光明池駅が我が家の最寄り駅だったのですが、2駅先の泉ヶ丘にある図書館まで、自転車で本を借りに行くようになりました。6年生の時の父からの誕生日プレゼントが、吉川英治「宮本武蔵」文庫本5巻セットでした。そこから「三国志」など吉川英治ワールドにどっぷり浸かります。一方で現代作家の面白さに気づき、光明池の天牛堺書店の古本コーナーで、流行っていた赤川次郎の作品をお小遣いで買うようにもなりました。

中学生になると、推理小説にはまり、大人版の「ホームズ」から、アガサクリスティ「ポアロ」シリーズなどを読み漁り、同時に友達の紹介でSF作家にはまります。夢枕獏「キマイラ」シリーズ（今のライトノベルのような作品。未だに完結してません…）、星新一、小松左京、そして筒井康隆。「家族八景」を読んだ時の感動は忘れられません。SFマガジン、SFアドベンチャーなどの雑誌で海外のSFを読むようにもなり、まさに今書かれている文学こそ価値があると感じていた中学2年生（私も中二病！）の自分に衝撃を与えたのが、中学校の図書室にあった小さいハードカバーのドストエフスキー「罪と罰」でした。古いものを価値の低い過去の遺物と考えていた私に、名作と呼ばれる作品は人類の宝なのだと思い知らせた作品でした。

こんなに本が好きなのに国語も得意でなく、読書感想文は大の苦手でした。ストーリーを夢中に追っているだけなので、何を書けばよいのかわからなかったのです。そんな私を見かねた母は、「本なら読むだろう」と『読書感想文の書き方』という本を買ってくれました（笑）

読書で培った「読む力」が私の学力を支えるようになり、国語の教師になる基礎となっていったのは、高校入学後のことでした。

【不定期コラムNo.12】へつづく

第三中学校ホームページ

では、子どもたちの様子やお知らせなど情報発信しています。ぜひご覧ください。これまでの不定期コラムも「校長室より」のコーナーでご覧いただけます。

<http://www.kaizuka.ed.jp/dai3-jh/>

貝塚第三中学校HP



貝塚第三中学校HP